

Title	ベトナム語における”逆語序”の効用
Author(s)	富田, 健次
Citation	大阪外国語大学学報. 54 p.35-p.51
Issue Date	1981-10-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80857
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ベトナム語における“逆語序”の効用

タイ・ベトナム語学科

冨 田 健 次

The Use of 'Word Inversion' in Vietnamese

by Kenji TOMITA

Vietnamese is a type of language which, fundamentally, has a progressive structure of word order, that is to say, in a compound word the former word is always modified by the latter one. From this point of view, Vietnamese is very similar to other South-eastern languages, for example, Mon-Khmer languages, Malayo-Polynesian, Siamese and so on, and has something in common with Tibet-Burmese and Miao-Yao languages, but is quite different from modern northern Chinese. Some southern dialects of Chinese which are thought to have had a structure of word order very similar to Vietnamese, have been almost assimilated into the regressive structure of northern Chinese. Vietnamese has been also greatly influenced by northern Chinese but has refused persistently its linguistic assimilation. On the contrary, Vietnamese has been always trying to assimilate the regressive structure of Chinese into its own structure. As the result of this attempt, there occurs in Vietnamese innumerable expressions which change the meaning or nuance by the 'Word inversion'.

1. 「南越」から「越南」へ：序にかえて

ベトナムという国名が漢字で「越南」と書くことができることは漢字使用国である日本では既によく知られたことである。「日越交渉」とか「対越貿易」とか、依然として新聞用字などにベトナムの意味で「越」¹⁾の字が当てられているのは周知のことである。「米」「英」「仏」などほど普及した用字ではないとしても、スペインの「西」、フィリピンの「比」ほどは今尚よく知られた用字ではないかと思われる。「越」を除く上の用字中、「英」「西」以外はすべて日本人の当字に由来するものであり、中国語ではアメリカは「美」、フランスは「法」、フィリピンは「菲」でなければならない

い。然し、日本人の当字にしる、中国人の当字にしる、それら各国の名称に極く近い音を持った漢字を選んで当てた呼び方から生まれた略称であることには違いない。

ところで、ベトナム（ベトナム人の発音に極く忠実に表記すればヴィエトナム）の国に与えられているこの「越南」という漢字は如何なる由来を有する用字であったのだろうか。勿論、上に挙げた各国の名に当てられた字のように国の名称が先にあつてそれに近い音を持った漢字が選ばれて当てられたものではないことは確かである。では一体、「越南」の二字は如何なる由来を持っているのであろうか。

歴史を少し遡れば直ちに明らかになることであるが、ベトナムが未だ中国南部の広東、広西などの地方と明確な区別もなく、後に「百越」などと漠然と中国人に総称される非漢民族の諸部族と混沌とした生活を送っていた頃の紀元前207年、秦の滅亡前夜の混乱に乗じて、当時中国南部に置かれていた桂林、南海、象の各郡を併わせて番禺（今の広東）を拠点に自立した中国人官僚趙佗^{ちょうだ}は、自ら「南越（又は粵）」王を称し、「南越」国なるものを建国している。この版図の中には今のベトナムの一部が含まれていたと考えられているのである。この時、王ならびに国の命名に際しては、恐らく、越（粵）族の中でも最も南に位置する越族の王又は国という意識が働いたものと想像される。そしてベトナムはその「南越」国の中でも更に南に位置する西瓠駱または瓠越、駱越などの名称で歴史文献に登場する越族らしい部族の居住する所だったのである。²⁾

その後、紀元前111年、漢の武帝の時に至って遂にこの国は滅ぼされ、この土地に九郡が置かれることになる。このうち交趾、九真、日南の三郡が現在のベトナム領内に置かれたと考えられている。こうしてベトナムというやや実体を備えた地域が徐々に歴史の舞台へ登場して来るのであるが、以後紀元938年に呉権^{ゴークエン}が中国南漢軍を白藤江で撃破し、一応の民族独立を達成するまで実に一千余年もの長期に亘って中国の直接的支配下に置かれていたのである。

その間、幾度かベトナム人による独立の試みがなされているのであるが、例えば紀元544年に当時の中国人交州刺史の軍を撃ち破って「万春^{ヴァンズアン}」という国を打ち建てた李贇^{リーホン}のように、彼らもやはり同様に「南越」帝を自称しているのである。この場合の「南越」は、上の趙佗の「南越」とは意味が異なり、純粹にベトナムの土地のみを指していると思われる。

因みに独立後の国号について瞥見してみると、紀元968年、全土を統一して丁朝を創めた丁部^{ディン}領^{ディンボ}は国号を「大瞿越^{ダイコーヴィエト}」(「瞿」は漢語本来の〈驚く、恐れる〉の意ではなく、ベトナム語の〈突出した、秀でた〉の意に用いられる字喃^{チュノム}つまり漢字改造の民族文字)と定め、それは後に李朝の聖宗^{リー}によって「大越^{ダイヴィエト}」と改められている(1054年)。この国号はその後に続く陳朝(1225~1399)でも維持され、1400年に胡朝を創めた胡季犛^{ホー}によって一旦「大虞^{ホークイリー}」と改められてはいるが、属明期(1413~1427)を脱して建設された黎朝(1428~1793)に至って再び「大越^{ダイグー}」が復活しているのである。

ところが、1802年、阮朝(1802~1945)の開祖阮福映(世祖嘉隆帝)は、阮朝の創設と同時に使者を時の中国清帝国に遣わし、清帝に国号を「大越」ではなく往古にしばしば用いられた「南越」^{グエン}と改めることを請うているのである(山本達郎編『ベトナム中国関係史』p. 493)。しかし清帝は、

「南越」国では趙佗の「南越」国を想起させ好ましからぬ印象を与えるという理由でこれを許さず、「南越」を逆にした「越南」という国号を受諾させることによって宗主国たるの權威を示したのだと言はれる(同上書p.493)。ここに至って初めて「南越」ではなく「越南」という国号が文献上に正式に登場するのである。

しかし、阮朝の各王は、このような経緯から生まれたとされるこの国号に満足を示さず、嘉隆帝に続く明命帝の時に至って、宗主国たる清朝には恐らく内密に「大南」という国号を秘かに設けているのである。その理由は、「先帝の時に至り、わが朝は安南の地をも奄有するに至ったので、国号を大越南国と称することとし、曆書にはその略称を用いて大越とのみ記した。ところが、陳朝や黎朝の曆にも同様に大越という二字が印されていたのを知っている民間無知の者共は、それとこれを同一視したり誤解したりして面白くないので、今後は一切大越と称するのをやめて大南と改めることにした」(同上書p.494, …点筆者)というのである。つまり、「大南」は「大越南国」の略称であると言う主張なのである。以後、清朝に対しては依然として「越南」という国号を用い、国内では「大南」という国号を専ら使用するという奇妙な現象が続いているのである。

フランス植民地時代に入ると、1884年パトノートル条約の締結と同時に、既に清朝より授けられていた「越南国王之印」が廃棄され、以後、フランス植民地主義者達は三分割した土地のひとつであるに過ぎないアンナン(安南)保護王国に冠せられたアンナンの名をもってベトナム国土全体の汎称とするようになるのである。この「安南」は「鎮南」などの呼称と同様に遠き中国植民地時代の呼称であり、フランス植民地主義者達にとってはまことに都合のよい呼称であったとしても、当のベトナム人自身にとっては極めて屈辱的なイメージを呼び起こす呼称であったに違はなく、1945年8月、ホーチミンによる所謂「8月革命」によって、ベトナムには再び「ベトナム民主共和国」という名称の下に「越南」の二字が正式に復活するのである。こうして、ベトナムは名実ともにベトナム(越南)という国号を獲得し現在にまで至っているのである。

このように、ベトナムがベトナム(越南)という国号を正式に用い出したのは1802年つまり19世紀の初めのことであり、しかも中国清朝によって押しつけられた形で使用するようになったのだと従来から考えられているのであるが、筆者はこれに対して従前よりいささかの疑いを抱いて来た。即ち、確かに文献上に登場する正式の国号としては上で言われる如くであったのかも知れないが、民間では実は早くからこの「越南」の呼称は存在していたのではないかと疑っているのである。

その先ず第一の論拠は、極めて逆説的に響くかも知れないが、阮朝各王が徹底的にこの名称を拒否し続けていることである。これは単に清朝によって押しつけられたためと考えるよりは、巷間に広く流布している俗稱を一国の正式な国号とすることに対する耐え難い屈辱感から来る抵抗と解釈の方が妥当だと思うのである。「南越」という呼称は確かに中国語の語構成の法則に照らして当を得た正統な「漢語」である。つまり、「南国」「南方」などの熟語と同様に前部要素が後部要素を限定、修飾する関係から成る熟語として極く自然であり、「閩越」^{びんえつ}「貉越」^{らくえつ}などという越族全

搬に対する命名法ともよく合致するのに対し、「越南」はどう考えてみても中国人による正統な漢語熟語とは言い難く、逆に、後部要素が前部要素を限定、修飾するベトナム語の語構成法に基づくベトナム人による命名と考えられるのであり、このような正統な漢語熟語ではないものをもって自国の称号とすることへの屈辱感こそこの国号を拒否し続けて来た最大の理由ではなからうか。

では、「越南」が「南越」のベトナム語的言い換えとするならばその論拠がどこにあるのかを一言しておかねばなるまい。ベトナム人は古くから中国および中国人のことを「北国」^{バククォック}「北人」^{バクニヤン}と呼び慣わしており、これに対して自分達のベトナムおよびベトナム人のことは「南国」^{ナムクォック}「南人」^{ナムニヤン}と呼んでいたものであり、当時固有の文字を持っていなかったベトナム人は漢字で上のように表記するしかなかった。ところが、表記手段にこだわらぬ一般大衆はこのような漢語式の呼称にはなじまず、常に自らの言語の語構成に合わせた呼称を用いていたのである。つまり、漢語の熟語である、

- { 「北国」(Bắc quốc)
- { 「北人」(Bắc nhân)
- { 「南国」(Nam quốc)
- { 「南人」(Nam nhân)

に対して、それぞれベトナム語式に、

- { nu'óc Bắc <国> + <北>
- { ngu'ò'i Bắc <人> + <北>
- { nu'óc Nam <国> + <南>
- { ngu'ò'i Nam <人> + <南>

と呼び慣わしていたのであり、この例に倣うと漢語熟語「南越」がベトナム語式に「越南」と呼び換えられていたとしても何ら不思議なことではない。しかもこれらの俗なる呼称は漢字表記の文献には決して現われることはなかったのである。

ところが、誠に不思議なことに、この名が冠された書物が14世紀末から15世紀初めに存在していたらしい証拠に筆者は偶然出会ったのである。これを筆者の上の論拠の第二点として掲げておきたい。

全く偶然に発見したのであるが、^{ファンツイチュウ}潘輝注(1782~1840)の著したかの有名な『歴朝憲章類誌』(全49卷)「文籍誌」卷45「傳記類」の項に、「越南」の名を冠した『越南世誌二卷』の名が挙げられているのである。³⁾著者は^{ホートントック}胡宗鑑という文人政治家で、生没年月日は詳らかではないが陳末~胡朝つまり14世紀末から15世紀初めにかけて活躍した人であることが知られている。勿論この作品そのものは既に散佚しており、その序文だけが『類誌』に掲載されているのである。この序文は^{ブーティン}武瓊(1453~1516?)の^{リンナムチッククワイ}『嶺南摭怪』伝の序文の影響が極めて色濃いと見られている(Tho' văn Ly-Trần(李陳詩文) tập III p.613 註(7))。従来この書名に冠された「越南」は「南越」の誤記と解釈されており、各種の文学史の本にもわざわざ「南越」に直して登録されている。⁴⁾しかしその論拠は、ただ、当時「越南」という呼称があったはずがないという憶測に過ぎないのである。

もしこの記述を真とするならば、「越南」の呼称が14世紀末から15世紀初めには既に存在していたことの証拠となすことができるのではないだろうか。

2. ベトナム語語彙構成における“中国”化

ベトナム語の語彙の中には、文化語彙のみならずあらゆる分野の語彙に漢語借用語が深く浸透している。その割合は人によって6割とも7割とも言われている。ベトナム人は、その長い歴史を通じてこれらの漢語を、もっと正確に言えば漢語と意識されている語彙を可能な限りベトナム語に言い換えようと試みて来た。ごく卑近な例で示せば、

「国家」(quốc gia)

→ nhà nu'óc 〈家〉 + 〈国〉

「外国」(ngoại quốc)

→ nu'óc ngoài 〈国〉 + 〈外〉

「商家」(thủ'ơng gia) 〈商人〉

→ nhà buôn 〈家〉 + 〈商う〉

の如くである。このような民族語への言い換えに民族主義的抵抗精神の発露の一端を垣間見ることは容易なことである。

現代中国語(ここでは北方共通語)においては、単語構成の基本は、

修飾成分 + 名詞語幹

の順であり、常に修飾成分が名詞語幹に前置される。例えば〈美人〉は「美人」であって「人美」ではあり得ないのである。ところが、一方のベトナム語では、既に少し述べた如く、その単語構成の基本は、

名詞語幹 + 修飾成分

であり、〈美人〉は「美人」の順ではなく、逆に「人美」の語順を基本としている。ところがベトナム語には既に漢語借用語としてこの「美人」(mỹ nhân)という、中国語単語構成法に則った借用熟語が存在しているために事は一層複雑なのである。例えば日本語では、「美人」を「美しい人」と言い換えたところでその“語序”の面ではほとんど変更がなく、両者を併用することはさほど抵抗はないのであるが、ベトナム語では二つの熟語、

$$\begin{cases} mỹ nhân & \text{「美人」} \\ ngu'ò'i đẹp & \text{〈人〉 + 〈美しい〉} \end{cases}$$

は、このように“語序”が全く異なるのであり、思考の所謂“線条性”から見ると極めて矛盾した様相を呈しているのである。これは先に挙げた「国家」「外国」「商家」等のベトナム語式言い換え現象のすべての例にも共通して言えることである。このような“語序”を民族語式に転倒させる言い換えの例は、ベトナム語中には枚挙の暇ないほど数多く見出せるのである。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の橋本萬太郎教授によると、所謂中国語型の名詞句構造は「逆行構造」と呼ばれ、ベトナム語式のそれは「順行構造」と呼ばれるのだそうであるが（『言語類型地理論』p.35）、ベトナム語は正に氏の言う「南方型の名詞句構成」を有する代表的言語の一つであるとともに、一方では、既に上で述べた如くこの両構造が今尚激しい競合を演じているのである。再び氏によると、「たとえ一言語のなかで両構造が混在する異質なケースがみいだされても、それは歴史的地域的推移の過程にあるものと解される場合が多い」（同上書p.36）と言うことであるが、果たしてベトナム語もそのような“場合”の一つであると解釈できるのだろうか。

確かに広東語（粵語）や福建語（閩越語）などを見ると、ベトナム語式の語構成を有する複合語が数多く存在し、このような所謂非中国語的語構成法による名詞は大部分が“化石”化したものであり、一部を除いては完全に造語能力を失ってしまっている。⁵⁾つまり、問題を名詞句構成に限って言えば、上の諸語は既に北方中国語に完全に同化されてしまい、近い将来にはそれら“化石”的語彙もすべて廃棄されてしまう運命にあるのだとすることができよう。その意味では現在の状態は『順行構造』から「逆行構造」へ同化されて行く「推移の過程」であると見ることができよう。

一方、同様に中国語の強い影響を受けたベトナム語においては、逆にその“化石”的語彙構成法こそが依然主流であり、北方中国語型の語彙構成法は、造語能力を完全に失ったとは言い得ないにしてもやはり“借り物”という感覚はベトナム人にぬぐい難く、つまりこの点ではベトナム語の北方中国語への同化は完全に失敗に終わった訳であり、両者が今尚ベトナム語中であって競合関係を保っているとは言え窮極的にはすべてベトナム語型の構成法へと収斂して行く運命にあるのだとすることができるとも知れない。言葉を換えて言えば、「順行構造」を持った言語が、「逆行構造」の破壊的影響を受けながらも依然「順行構造」を守り続け、その影響から脱して以後は、「逆行構造」を言わば逆手に取って、これを巧みに自らの言語に同化して行く、ベトナム語は正にその「歴史的推移」の過程にあると見ることもできるだろう。

同じ「越族」の仲間のことばのひとつと言われるベトナム語は、他の福建、広東語がほぼ完全に北方中国語の「逆行構造」に同化されてしまいつつあるのに対し、自らの「順行構造」を守りぬき、逆に北方中国語の「逆行構造」を自らの構造へと同化しつつあるのである。そしてまことに興味深いことには、福建、広東語において北方中国語式の「逆行構造」への完全な同化を妨げている要因が、話しことば即ち口語であるのに対し、ベトナム語においてベトナム語式の「順行構造」への完全な同化を妨げている要因は、実は書きことばつまり文語なのである。

3. ベトナム語語彙構成における“中国”語のベトナム化

さて、本論はどのように北方中国語からの破壊的影響を蒙りながらもそれらを逆手に取って自

家業籠中のものにして来たベトナム人の様々な技巧，とりわけその“語序”の面における技巧に光を当てて若干の考察を加えんとするものであるが，その最も興味ある例は，所謂漢語借用語である「社会主義」という複合語の処理の仕方である。これは四字の漢語複合語であり，他の「自由主義」「民主主義」などと同様に前部要素が後部要素を修飾する中国語式語構成法に則って，

X + 「主義」

の順に配列された熟語であると考えられる。この熟語はベトナム語中にも極く自然に取り入れられているのであるが，その取り入れられる過程が実に興味深いのである。実は，ベトナム語ではこの順序で読まれる場合，御本家の中国語や日本語などのように所謂〈社会主義〉という概念を意味する単独の語彙とはならず，必ず他の名詞に後置されて，〈社会主義の〉〈社会主義的〉という意味を持った限定形容詞となるのである。例えば，〈社会主義思想〉は，

tu' tu'ỏ'ng xā hội chủ nghĩa

「思想」 + 「社会主義」

の如く言い，〈社会主義的問題〉は，

vấn đề xā hội chủ nghĩa

「問題」 + 「社会主義」

の如く言われるのである。またベトナムの現在の国号である〈ベトナム社会主義共和国〉は，

Nu'ỏ'c cộng hòa xā hội chủ nghĩa Việt Nam

〈国〉 + 「共和」 + 「社会主義」 + 「越南」

の配列になるのである。つまり，この「社会主義」という四字の漢語はもうこれ以上決して分析することの許されないひとつの塊りとしてベトナム人には意識されており，その文法的機能も限定形容詞的用法のみに制限されているのである。

ところで，では〈社会主義〉という独立した概念を示す名詞句はベトナム語では如何なる表現をするのであろうか。ここでベトナム語の名詞句構成法をもう一度想い起こして頂きたい。ベトナム語の語彙構成法に従うなら，〈社会主義〉とて，

「主義」 + X

の配列になることは極く自然のことであり，正しくベトナム語では名詞句〈社会主義〉は，

chủ nghĩa xā hội 「主義」 + 「社会」

の如く呼ばれるのである。他の名詞句〈民主主義〉〈自由主義〉なども全く同様の配列に従う。つまり〈社会主義〉という概念は，それまでも既に存在していた種々なる〈主義〉のひとつとして扱えられたのであり，同じ漢語借用語である「主義」を名詞語幹として〈社会の〉〈社会的〉を意味する限定修飾語「社会」を後置させたに過ぎないのである。この発想は極めてベトナム語的ではないかと思われる

こうしてベトナム語の中には互いに文法的機能の異なる二つの〈社会主義〉が成立したのである。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{xã hội chủ nghĩa} \text{ 「社会主義」} \rightarrow \langle \text{社会主義的, 社会主義の} \rangle \\ \text{chủ nghĩa xã hội} \text{ 「主義」} + \text{「社会」} \rightarrow \langle \text{社会主義} \rangle \end{array} \right.$

限定形容詞としてのみ用いられる前者はベトナム人にとっては依然として外来語的であるのに対し、名詞句として用いられる後者は、その構成要素のひとつ一つ、つまり「主義」および「社会」という各々の語彙はやはり外来語的に知覚されるにも拘らずこのようにベトナム語式に配列された後はごく自然なベトナム語とベトナム人には把握されるのである

即ち、ベトナム語においては“語序”が「逆行構造」である場合にはやはり外来語的に知覚されるのに対し、それが「順行構造」に変わるや否や、その個々の要素が何であるかを問わず、ごく自然なベトナム語としてベトナム人に知覚されるものとなるのである。このようにベトナム人は意識下に依然として「順行構造」を固守し続けているのである。

4. ベトナム語語彙構成に見る“語序”の技巧

ところで、上に見たような「逆行構造」を巧みに利用しつつ「順行構造」と併存させる技巧は果たして中国語の影響の下で初めて発生したものであろうか、実はそうではなく既に古くから見られる極めて普遍的な現象であったのではなからうか。以下に、それらの技巧について例示し、解説を加えてみたいと思う。

1) 数詞を用いた例

数詞を用いたある種の言い方、例えば〈三ヶ月〉と〈三月〉の呼び分けなどにその技巧の典型を見ることができる。即ち、ベトナム語では上のそれぞれを、

$\left\{ \begin{array}{l} \text{ba tháng} \langle \text{三} \rangle + \langle \text{月} \rangle \rightarrow \langle \text{三ヶ月} \rangle \\ \text{tháng ba} \langle \text{月} \rangle + \langle \text{三} \rangle \rightarrow \langle \text{三月} \rangle \end{array} \right.$

の如く、“語序”を巧みに利用することによってこれを言い分けている。中国語では“語序”によってこれを言い分けることができず、前者の場合、「三」と「月」の間に全く別の単語（助教詞）「箇」を補わなければならないのであり、日本語でもそれをそのまま借用するか或いは和語で「みつき」などと呼んで後者の「サンガツ」と区別しなければならないのである。つまり、ベトナム語においては、純粋に数量を示す時には常に数詞を名詞に前置させ、つまり「逆行構造」を利用し、順序や序列を明示したい時には常に数詞を名詞に後置させる、つまり「順行構造」を利用して前者との区別をはかっているのである。これによって〈十一日間〉と〈十一日〉も、

$\left\{ \begin{array}{l} \text{mu'ò'i một ngày} \langle \text{十一} \rangle + \langle \text{日} \rangle \\ \text{ngày mu'ò'i một} \langle \text{日} \rangle + \langle \text{十一} \rangle \end{array} \right.$

の如く言い分けられるし、その疑問形である〈何日間〉と〈何日〉も、

$\left\{ \begin{array}{l} \text{bao nhiêu ngày} \langle \text{幾} \rangle + \langle \text{日} \rangle \\ \text{ngày bao nhiêu} \langle \text{日} \rangle + \langle \text{幾} \rangle \end{array} \right.$

という具合に言い分けることが可能な訳である。周知の如く、日本語ではこの区別についても極めて曖昧である。例えば、「今日は何日?」「今日は十一日」「あと何日ある」「あと十一日」などのようにその区別は全面的に文脈に依存しているのである。但し、時間及び時刻の言い分けの場合は日本語の方が分が良い。例えば日本語では「三時間」と「三時」はまず混同されることはない。ところがベトナム語ではどちらも、

ba giờ (三) + (時)

で表わされ元々区別がない。これは中国語でも「三点鐘」のみで区別がないようである。もし、上で述べたベトナム語の論理に従えば順序としての時刻は (時) + (三) の“語序”になるべきであろうが、やはり時刻も数量として把えることが習慣化してしまっているためにこのような混乱を引き起こしているのであろう。そこでベトナム人はこの混乱を防止するために、(三時間) と言う場合には通常、(時計) に当ることばを更に後置させるという新たな技巧を思いついた。

ba giờ đồng hồ (三) + (時) + (時計)

更にはこの意味でのみ、(時) に代えて (音, 声) を用いることもある。

ba tiếng (đồng hồ) (三) + (音, 声) + (時計)

また数詞を用いた“語序”転倒の例に次のようなものも見られる。

{ ba đinh (三) + (釘) → (三本の釘)
đinh ba (釘) + (三) → (三又の鉾)

しかしこの後者の例の数詞は別に序列や順序を示すものではなく、むしろ (三つの又を持った) とでもいうような意味の修飾語の働きをするものであろう。

最後に、これは全くの余談であるが、ベトナム人の言葉遊びの中から例を取ると、

{ nghìn năm (千) + (年) → (千年)
năm nghìn (五) + (千) → (五千)

これは năm という音節に (年) と (五) の両意があることを利用した音節倒置の遊びである。

2) 類別詞を用いた例

次に、類別詞を用いた“語序”転倒の例を瞥見してみよう。

{ tờ giấy (紙につく類別詞) + (紙) → (一枚の) 紙
giấy tờ (紙) + (紙につく類別詞) → (書類, 資料)

このペアの後者の由来については筆者は詳らかでない。

また中国語からの借用語を巧みに利用した例もある。

{ kịch bản 「劇本」 → (劇, 戯曲)
bản kịch (文書などにつく類別詞) + 「劇」 → (台本, シナリオ)
văn bản 「文本」 → (文書, 資料)
bản văn (文書などにつく類別詞) + 「文」 → (テキスト, 教書)

それぞれの対の上の方の熟語は「～本」という中国語からのそのままの借用に由来する語彙であ

り、極めて外来語的なものであるのに対して、下の方の熟語は、中国語の「～本」を分析した結果として得られた「本」という要素をベトナム語の中に取り入れて、〈文書類〉を示す類別詞として機能させることによって発生した表現であり、その点では正にベトナム語的熟語となっているのである。

同様な言い方に次のような例がある。

- bản sao 〈文書などにつく類別詞〉 + 〈写す〉 → 〈抄本〉
 bản in 〈 〃 〉 + 〈印刷する〉 → 〈印本〉
 bản thảo 〈 〃 〉 + 「草」 → 〈草稿〉
 bản kê 〈 〃 〉 + 〈列挙する〉 → 〈リスト〉

先に挙げた二つの対は、結果的には、あたかも“語序”の倒置によって意味のニュアンスを言い分けることのできる極めて稀有な例である。

その他、

- { củ hành 〈球根類につける類別詞〉 + 〈葱〉 → 〈玉葱〉
 hành củ 〈葱〉 + 〈球根類につける類別詞〉 → 〈根を食べる種類の葱の総称〉

などの例は枚挙に暇ない。

また、類別詞とは言えないが類別詞的に用いられる〈種類〉を表わす語彙と名詞の組み合わせによる次のような例も仲々興味深い。

- { nòi gà 〈種類〉 + 〈鶏〉 → 〈鶏（種類）〉
 gà nòi 〈鶏〉 + 〈種類〉 → 〈闘鶏用良種鶏〉

因みに、類別詞又は名詞との同音異義性を利用した音節転倒の例を二三挙げておこう。

- { con chó 〈動物につく類別詞〉 + 〈犬〉 → 〈(一匹の)犬〉
 chó con 〈犬〉 + 〈子供の〉 → 〈小犬〉
 { con ngu'ò'i 〈動物につく類別詞〉 + 〈人〉 → 〈人間, 人類〉
 ngu'ò'i con 〈人間につく類別詞〉 + 〈子供〉 → 〈子供〉
 { cái nhà 〈非動物につく類別詞〉 + 〈家〉 → 〈(一軒の)家〉
 nhà cái 〈何かを専門とする人につく類別詞〉 + 〈博打の親〉 → 〈胴元〉
 { con cò 〈動物につく類別詞〉 + 〈鷺〉 → 〈(一羽の)鷺〉
 cò con 〈ペニス〉 + 〈子供〉 → 〈小さい, 少ない〉

3) 動詞と客語の位置の転換による例

動詞と客語（名詞）からなる複合動詞又は句が“語序”の転換によって名詞＋限定修飾語から成る複合名詞になる例を次に見てみよう。この例はベトナム語の中では非常に多い。

- { muối dũ'a 〈塩漬けする〉 + 〈瓜〉 → 〈瓜の漬け物を作る〉
 dũ'a muối 〈瓜〉 + 〈塩漬けする〉 → 〈瓜の漬け物〉
 { tráng trũ'ng 〈薄く広げる〉 + 〈卵〉 → 〈オムレツを作る〉
 trũ'ng tráng 〈卵〉 + 〈薄く広げる〉 → 〈オムレツ〉

- { chấ́m nu'ố'c 〈浸す〉 + 〈水, タレ〉 → 〈タレに浸す〉 〈水につける〉
 nu'ố'c chấ́m 〈水, タレ〉 + 〈浸す〉 → 〈タレ, ソース〉
- { ăn co'm 〈食べる〉 + 〈飯〉 → 〈食事する〉
 co'm ăn 〈飯〉 + 〈食べる〉 → 〈御飯〉
- { uố́ng nu'ố'c 〈飲む〉 + 〈水〉 → 〈茶を飲む〉
 nu'ố'c uố́ng 〈水〉 + 〈飲む〉 → 〈飲料水〉
- { ở' nhà 〈居る〉 + 〈家〉 → 〈在宅する〉
 nhà ở' 〈家〉 + 〈居る〉 → 〈住居〉
- { nắm co'm 〈握る〉 + 〈飯〉 → 〈おにぎりを作る〉
 co'm nắm 〈飯〉 + 〈握る〉 → 〈握り飯〉
- { rán nem 〈油で揚げる〉 + 〈肉ダンゴ〉 → 〈ベトナム春巻きを作る〉
 nem rán 〈肉ダンゴ〉 + 〈油で揚げる〉 → 〈ベトナム春巻〉
- { chiế́n cá 〈油で揚げる〉 + 〈魚〉 → 〈魚を油で揚げる〉
 cá chiế́n 〈魚〉 + 〈油で揚げる〉 → 〈魚のから揚げ〉 又は 〈鱮魚, 鱖魚⁶⁾〉
- { viên thuốc 〈丸める〉 又は 〈丸い塊に付く類別詞〉 + 〈薬〉 → 〈薬を作る〉 又は 〈(一錠の)薬〉
 thuốc viên 〈薬〉 + 〈丸める〉 → 〈丸薬〉
- { tiêm thuốc 〈注射する〉 + 〈薬〉 → 〈注射する〉
 thuốc tiêm 〈薬〉 + 〈注射する〉 → 〈注射液〉
- { lát gạch 〈舗装する〉 + 〈レンガ, タイル〉 → 〈舗装する〉
 gạch lát 〈レンガ, タイル〉 + 〈舗装する〉 → 〈舗装用レンガ〉
- { đạp xe 〈踏む〉 + 〈車〉 → 〈自転車に乗る〉
 xe đạp 〈車〉 + 〈踏む〉 → 〈自転車〉
- { yêu ngu'ồ'i 〈愛する〉 + 〈人〉 → 〈人を愛する〉
 ngu'ồ'i yêu 〈人〉 + 〈愛する〉 → 〈恋人〉
- { thu'ồ'ng vọ' 〈愛する〉 + 〈妻〉 → 〈妻を愛する〉
 vọ' thu'ồ'ng 〈妻〉 + 〈愛する〉 → 〈愛しき妻〉
- { đá bóng 〈蹴る〉 + 〈ボール〉 → 〈ボールを蹴る〉 〈サッカーをする〉
 bóng đá 〈ボール〉 + 〈蹴る〉 → 〈サッカー〉 〈サッカーボール〉
- { trốn lính 〈逃げる〉 + 〈兵〉 → 〈兵役を拒否する〉
 lính trốn 〈兵〉 + 〈逃げる〉 → 〈脱走兵〉
- { đỏ đèn 〈赤い〉 + 〈燈〉 → 〈明りがついてる〉
 đèn đỏ 〈燈〉 + 〈赤い〉 → 〈赤信号〉
- { nóng sốt 〈熱い〉 + 〈熱〉 → 〈まだ暖かい〉 〈怒りっぽい〉

sốt nóng	〈熱〉 + 〈熱い〉 → 〈熱〉
thối mồm	〈腐る〉 + 〈塩辛〉 → 〈塩辛を腐らせる〉
mồm thối	〈塩辛〉 + 〈腐る〉 → 〈腐った塩辛〉
thủng lỗ	〈穴をあける〉 + 〈穴〉 → 〈穴をあける, 破れる〉
lỗ thủng	〈穴〉 + 〈穴をあける〉 → 〈穴, 破れ目〉
thiên chó	〈去勢する〉 + 〈犬〉 → 〈犬を去勢する〉
chó thiên	〈犬〉 + 〈去勢する〉 → 〈食用去勢犬〉
giảng bài	〈講ずる〉 + 〈文章〉 → 〈講義する〉
bài giảng	〈文章〉 + 〈講ずる〉 → 〈講義録, テキスト〉
viết chữ	〈書く〉 + 〈文字〉 → 〈文字を書く〉
chữ viết	〈文字〉 + 〈書く〉 → 〈文字〉
ăn hàng	〈食べる〉 + 〈店〉 → 〈外食する〉
hàng ăn	〈店〉 + 〈食べる〉 → 〈食堂〉
bỏ mẹ	〈捨てる〉 + 〈母〉 → 〈母を捨てる〉 〈クソッたれ, 何てこった〉 ⁷⁾
mẹ bỏ	〈母〉 + 〈捨てる〉 → 〈子供を見捨てた母親〉
chết bố	〈死ぬ〉 + 〈父〉 → 〈父に死なれる〉
bố chết	〈父〉 + 〈死ぬ〉 → 〈故父〉
chôn tiền	〈埋める〉 + 〈お金〉 → 〈お金を埋める〉
tiền chôn	〈お金〉 + 〈埋める〉 → 〈埋蔵金〉
bế cô	〈抱く〉 + 〈彼女〉 → 〈彼女を抱く〉
cô bế	〈彼女〉 + 〈抱く〉 → 〈抱かれた彼女〉
gio' đít	〈丸出しにする〉 + 〈尻〉 → 〈尻を丸出しにする〉 〈貧しくなる〉
đít gio'	〈尻〉 + 〈丸出しにする〉 → 〈丸出しの尻〉 〈極貧の〉

最後のペアの後者は、フランス語の *dix heures* 〈十時〉の音写でもあり、〈十時だ〉と〈金がない〉の両意を掛けたことば遊びとしてよく用いられる例でもある。

4) 複合名詞内部における転換の例

次に多い例は、複合名詞の内部において、“語序”を転倒させることによって修飾関係を入れ替える例である。既に日本漢語の中にも、例えば「社会」:「会社」, 「王女」:「女王」, 「先祖」:「祖先」, 「平和」:「和平」, 「途中」:「中途」, 「始終」:「終始」などの如く、修飾関係を転倒させて意味の区別、ニュアンスの区別をするものが幾つか存在するが、そのような例とやや似ていると言えようか。

先ず、中国語からの直接の借用に由来する例は、

tổ su'	「祖師」 → 〈一派の学門, 宗門を開いた師〉
su' tổ	「師祖」 → 〈自分の師の師〉 〈何事にも秀でた人〉

上の対は両者とも中国語の語構成つまり前部要素が後部要素を限定修飾することによって成立したものであるが、これに似た例はベトナム語漢語にもある。

- { pháo thủ 「砲手」 → 〈砲手〉
- { thủ pháo 「手砲」 → 〈手榴弾〉

いずれも前の要素が後の要素を修飾している。しかし次の例の後者は恐らくベトナム語の語構成法つまり後の要素が前の要素を修飾する構成法に則って解釈すべきものではなからうか。

- { quân đội 「軍隊」 → 〈軍隊〉
- { đội quân 「隊軍」 → 〈部隊〉

その他、“逆語序”によって修飾関係を異にする興味深い語彙の例を幾つか列挙してみよう。

- { nhà nu'óc 〈家〉 + 〈国〉 → 〈政府, 国家機構〉
- { nu'óc nhà 〈国〉 + 〈家〉 → 〈国家, 故国〉
- { nhà chùa 〈家〉 + 〈寺〉 → 〈寺院〉
- { chùa nhà 〈寺〉 + 〈家〉 → 〈壇家の寺, 自分の建てた寺〉
- { nhà máy 〈家〉 + 〈機械〉 → 〈工場〉
- { máy nhà 〈機械〉 + 〈家〉 → 〈家の機械〉
- { nhà ô-tô 〈家〉 + 〈車〉 → 〈ガレージ〉
- { ô-tô nhà 〈車〉 + 〈家〉 → 〈家の車〉
- { đèn bàn 〈燈〉 + 〈卓子〉 → 〈電気スタンド〉
- { bàn đèn 〈卓子〉 + 〈燈〉 → 〈阿片吸引用卓子〉
- { lá thuốc 〈葉〉 + 〈葉〉 → 〈藥草〉
- { thuốc lá 〈葉〉 + 〈葉〉 → 〈煙草〉
- { lá hành 〈葉〉 + 〈葱〉 → 〈葱の葉〉
- { hành lá 〈葱〉 + 〈葉〉 → 〈食葉葱〉
- { dái trâu 〈陰茎〉 + 〈水牛〉 → 〈水牛の陰茎〉
- { trâu dái 〈水牛〉 + 〈陰茎〉 → 〈雄の水牛〉
- { xu'óc cá 〈骨〉 + 〈魚〉 → 〈魚の骨〉
- { cá xu'óc 〈魚〉 + 〈骨〉 → 〈骨っぽい魚〉
- { su'óc đêm 〈霧〉 + 〈夜〉 → 〈夜霧〉
- { đêm su'óc 〈夜〉 + 〈霧〉 → 〈霧の夜〉
- { bàn bóng 〈卓子〉 + 〈ボール〉 → 〈卓球台〉
- { bóng bàn 〈ボール〉 + 〈卓子〉 → 〈卓球, 卓球ボール〉
- { ruột cô 〈腸〉 + 〈彼女〉 → 〈彼女の腸, 心〉
- { cô ruột 〈叔母〉 + 〈腸〉 → 〈実の叔母〉⁸⁾
- { máy nu'óc 〈機械〉 + 〈水〉 → 〈水道〉

nu'óc máy	〈水〉 + 〈機械〉 → 〈水道水〉 ⁹⁾
lá trà	〈葉〉 + 〈茶〉 → 〈茶の葉〉
trà lá	〈茶〉 + 〈葉〉 → 〈袖の下〉

最後のペアの后者はその起源を全く詳らかにすることができない。

次に挙げる例は、対の内の前者は修飾関係を有する複合語ではなく単なる並列構造の複合語であるが、后者はやはり後の要素が前の要素を修飾する関係にある複合語又は句である。

anh em	〈兄〉 + 〈弟, 妹〉 → 〈兄弟〉
em anh	〈弟, 妹〉 + 〈君 (若輩の男性に対する二人称)〉 → 〈君の弟, 妹〉
mẹ con	〈母〉 + 〈子供〉 又は 〈僕(私)…母に向かって〉 → 〈母子〉 又は 〈僕(私)の母〉
con mẹ	〈子供〉 + 〈私(自分の子供に向かって)〉 → 〈私(お母さん)の子〉
bà con	〈祖母〉 + 〈子供〉 → 〈親戚〉
con bà	〈子供〉 + 〈貴女(年輩の女性に対する二人称)〉 → 〈貴女の子供〉
đồng bạc	〈銅〉 + 〈銀〉 → 〈貨幣〉 〈ピアストル〉
bạc đồng	〈銀〉 又は 〈硬貨〉 + 〈銅〉 → 〈銅貨〉
nhà củ'a	〈家〉 + 〈戸〉 → 〈家屋, 住居〉
củ'a nhà	〈戸〉 + 〈家〉 → 〈家事〉

最後のペアの后者についてはその起源を詳らかにすることができない。

更に、対の内の前者が敬語＋名詞、后者が名詞＋二人称より成っている例もある。

ông bố	〈年輩男性の敬称〉 + 〈父〉 → 〈お父さん, 父親〉
bố ông	〈父〉 + 〈年輩男性に対する二人称〉 → 〈貴男のお父さん〉
bà mẹ	〈年輩女性の敬称〉 + 〈母〉 → 〈お母さん, 母親〉
mẹ bà	〈母〉 + 〈年輩女性に対する二人称〉 → 〈貴女のお母さん〉

ついでに、同音異義語を利用した音節のみの転換を挙げておくと、

đạo cụ	「道具」 → 〈舞台道具〉
cụ đạo	〈老人の敬称〉 + 「道」(宗教) → 〈老神父〉
công dân	「公民」 → 〈公民〉
dân công	「民工」 → 〈賦役, 労役〉
cà cuống	〈桂花蟬〉
cuống cà	〈葉柄〉 + 〈茄子〉 → 〈茄子のヘタ〉

などがあり、よく言葉遊びなどに用いられている。

5) その他の“逆語序”の例

①中国語借用の複合名詞が、倒置によって意味が変わり動詞として用いられる例。

sự' kiện	「事件」 → 〈事件〉
kiện sự'	〈訴える, 告訴する〉 + 「事」 → 〈訴える〉

- { hóa học 「化学」→〈化学〉
- { học hóa 〈学ぶ〉+「化」→〈化学を学ぶ〉

②同じく中国語借用の複合名詞が、倒置によって副詞に転化する例。

- { sự thật 「事実」→〈事実〉
- { thật sự 〈本当に(の)〉+「事」→〈本当に、実に〉

③名詞+形容詞からなる名詞句が、倒置によって形容詞に転化する例。

- { hổ xấu 〈虎〉+〈醜い〉→〈醜い虎〉
- { xấu hổ 〈醜い〉+〈虎〉→〈恥しい〉¹⁰⁾

④同じく名詞+形容詞から成る複合名詞であるが、“語序”を転倒させると副詞+名詞から成る句になるもの。

- { anh cả 〈兄〉+〈最も大きい〉→〈長兄〉
- { cả anh 〈…でさえ〉+〈若輩の男性に対する二人称〉→〈君でさえ〉

⑤複合形容詞の各要素の倒置によって意味が変わるもの。

- { chịu khó 〈耐える〉+〈難しい〉→〈忍耐強い、熱心な〉
- { khó chịu 〈難しい〉+〈耐える〉→〈耐え難い、つらい〉

⑥複合動詞の各要素の倒置によって意味が変わるもの。後者は並列構造であろう。

- { nằm ăn 〈寝る〉+〈食べる〉→〈寝ながら食べる〉
- { ăn nằm 〈食べる〉+〈寝る〉→〈同棲する〉
- { làm thuê 〈働く〉+〈雇う〉→〈雇われる〉
- { thuê làm 〈雇う〉+〈働く〉→〈雇う〉
- { chỉ điểm 「指点」→〈通牒する〉
- { điểm chỉ 〈点ずる、浸す〉+「指」→〈捺印する、指紋を取る〉

⑦副詞+動詞よりなる句が並列構造の名詞又は複合動詞（形容詞）になる例。

- { còn sống 〈まだ〉+〈生きる〉→〈まだ生きている、命がある〉
- { sống còn 〈生きる〉+〈存在する〉→〈存在と進歩〉〈生き残る〉
- { ho'ì dài 〈やや〉+〈長い〉→〈やや長い〉
- { dài ho'ì 〈長い〉+〈息〉→〈元気な、力のある〉

上の例にやや似ているが、前部要素の同音異義語を利用した音節転倒の例。

- { hay nói 〈よく〉+〈話す〉→〈口数の多い〉
- { nói hay 〈話す〉+〈面白い〉→〈面白い話をする〉

上例の前者の省略形より派生したものであろうが、下のような例もある。

- { hay chuyện 〈よく〉+〈話〉→〈口数が多い〉¹¹⁾
- { chuyện hay 〈話〉+〈面白い〉→〈面白い話〉

⑧前置詞＋名詞から成る句が名詞＋形容詞からなる複合名詞になる例。

trên đầu	〈上に〉＋〈頭〉→〈頭上に〉
đầu trên	〈頭〉＋〈上〉→〈(筆などの)先〉
trong phòng	〈中に〉＋〈部屋〉→〈部屋の中に〉
phòng trong	〈部屋〉＋〈中〉→〈内の間〉

ついでに、これもことば遊びによく用られる幾つかの例を挙げておこう。これらはすべて統語論の範囲に及ぶ例である。

ai giết	〈誰〉＋〈殺す〉→〈誰が殺したのか〉
giết ai	〈殺す〉＋〈誰〉→〈誰を殺したのか〉
đi học	〈行く〉＋〈学ぶ〉→〈学校へ行く〉
học đi	〈学ぶ〉＋〈軽い命令〉→〈勉強しろ〉
không có	〈否定詞〉＋〈有る〉→〈ない〉
có không	〈有る〉＋〈疑問詞〉→〈有るか〉

5. 結び

上に見てきた如く、ベトナム語の語彙構成法は、基本的には「順行構造」であり、その点では東南アジア一般の言語、例えばモン・クメール語族やマラヨ・ポリネシア語族、タイ語などと全く共通であり、指示詞、代名詞に限って「逆行構造」をとるチベット・ビルマ語派やミャオ・ヤオ語などとも共通点を持ち、現代北方中国語とは根本的に異っている。南方中国の諸方言はその痕跡から推して、かつてはやはりベトナム語と同様の「順行構造」を有していたと思われるが既に北方中国語の「逆行構造」にほぼ同化されてしまった。同じ中国語の影響を多大に蒙ったベトナム語はこの「逆行構造」への同化をあくまで拒み、逆に、これを自らの「順行構造」の中に巧みに同化することを思いついた。こうして、ベトナム語中には“語序”を入れ替えることによって意味を変えたり、ニュアンスの差を描出したりする表現が無数に発生したのである。

1981年5月31日脱

註

- (1) 現代ベトナム語の正書法はローマ字を採用しており、多くのベトナム人は自らの国名がどのような漢字で書かれているのかを最早知らない。
- (2) ベトナムの概史については、松本信広・1969などを参照。
- (3) 潘輝注著 Nguyễn Thọ Dực 訳『歴朝憲章類誌』 Tủ sách cổ văn, Ủy ban dịch thuật Phủ Quốc vụ khanh Đặc trách Văn hóa xuất bản, 1972, Saigon, Tập IX 87b
- (4) 例えば, Đinh Gia Khánh 他編 Văn học Việt Nam – Thế kỷ thứ X nũ'a đầu thế kỷ thứ XVIII, tập I, P117 などを参照。
- (5) 広東語の所謂“逆語序”語彙については、富田健次・1979を参照。

- (6) 同音異義語で、後者は淡水魚の一種。
- (7) 〈母を捨てる〉〈父を捨てる〉などで、相手をのろったり、不意の心配などを示す感嘆詞となる。 *chết rồi* 〈死んだ〉より粗野。
- (8) *Cô* は〈叔母〉が原義。〈彼女(若い女性に対する三人称)〉又は二人称〈貴女〉は派生の意。この複合語は〈貴女の心〉ともとれる。
- (9) *nu'ố'c máy* は *nu'ố'c máy nu'ố'c* 〈水〉 + 〈木道〉の縮約形か。
- (10) この起源についてはよく解らないが、この外に、同じく〈恥しい、恥じる〉の意味でやはり〈虎〉を用いた *hổ then* 〈虎〉 + 〈恥じる、恥しがる〉がある。これは〈恥しがり屋の虎〉の意味では勿論なく、〈百獣の王の虎さえも恥じるほど恥しい〉の意味から発生した複合形容詞と思われる。これから推測すると、*xấu hổ* は、もしかしたら *xấu hổ then* つまり〈虎も恥じるほど醜い〉→〈恥しい〉の縮約形かも知れない。
- (11) この複合語は *hay nói chuyện* 〈よく〉 + 〈話す〉 + 〈話〉の縮約形。つまり、*nói* を省略したもの。その上の例の *hay nói* も *chuyện* を省略したものと考えられる。また、*nói hay* は *nói chuyện hay* 〈話す〉 + 〈話〉 + 〈面白い〉から *chuyện* を省略したものであろう。

参 考 文 献

- Đình Gia Khánh, Bùi Duy Tân, Mai Cao Chu'ố'ng, *Văn Học Việt Nam – Thê kỷ thứ' X nũ'a đầu thế kỷ thứ' XVIII* tập I Nxb. Đại học và Trung học chuyên nghiệp, Hà Nội, 1978
- 橋本萬太郎『言語類型地理論』弘文堂、東京、1978
- 松本信広『ベトナム民族小史』岩波書店、東京、1967
- 富田健次「越語と粵語の間から」『えとのす』(第11号) 新日本教育図書、下関、1979
- Ủy ban khoa học xã hội Việt Nam Viện văn học *Tho' văn Lý-Trần* (李陳詩文) tập III Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, 1978
- 山本達郎編『ベトナム中国関係史一曲氏の抬頭から清仏戦争まで』山川出版社、東京、1975

辞 書

- Văn Tân 主編 *Từ điển tiếng Việt* Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, 1977
- 黄明春主編『最新越漢辞典』越南新華書局發行, Chợ' Lớn, 1962
- Nguyễn Đình Hòa *Vietnamese-English Student Dictionary* Southern Illinois University Press, London and Amsterdam, 1971
- 中国語研究会編『中国語学事典』江南書院、東京、1958